

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：34507

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K11566

研究課題名（和文）スポーツの継続とペアレンティング：青年移行期を対象とした縦断研究

研究課題名（英文）Parenting in youth sport: the aspect of the motivational climate

研究代表者

梅崎 高行 (Umezaki, Takayuki)

甲南女子大学・人間科学部・教授

研究者番号：00350439

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：青年移行期には、児童期に親しんだスポーツからの離脱が目立つ。動機づけ支援によって離脱を予防し、スポーツの継続を支えることは、彼らの社会性の発達を支える課題である。本研究では、青年移行期のアスリートに、年に一度3年に渡る調査を実施した。継続的に収集されたデータの解析によって、支援者としての指導者、親、仲間の関わりを検討したところ、親による「選手が楽しみながら練習に取り組むことを奨励する関わり」が、アスリートの社会性の発達に重要であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

青年移行期の動機づけ支援に関する研究は、これまで2つの課題を抱えていた。1つは継続的にデータを収集して解析を行う研究（縦断研究）の欠如である。縦断研究の使用により、変数間の因果を同定し、子どもの発達を支える知見を提出することができる。もう1つは検討対象として取り上げられる動機づけ支援者の偏りである。これまでには指導者に注目が集中してきたが、指導者同様、青年移行期に影響をもつ支援者として、親や仲間の存在がある。本研究では以上2つの課題の解消を目指し、発達移行期の競技環境に関する論拠を提出した。

研究成果の概要（英文）：In the transition period between childhood and adolescence, we see a noticeable dropout from the sports they were familiar with in childhood. Preventing dropout and supporting the continuation of sports through motivational support is an issue that contributes to the development of their social skills. In this study, we surveyed athletes in transition to adolescence for three years (once a year). Analysis of the continuously collected data examined the involvement of coaches, parents, and peers as supporters, and indicated that "an atmosphere that encourages athletes to engage training while having fun" by parents influenced the development of athletes' social skills.

研究分野：発達心理学

キーワード：動機づけ雰囲気 縦断研究 動機づけエージェント（指導者、親、仲間） 社会性の発達 青年移行期
スポーツ エンパワリング/ディスエンパワリング・コーチング 多次元動機づけ雰囲気観察システム

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

1-1. 縦断デザインを用いた発達研究の要請

青年期に子どもたちは、それまで依存していた養育者から独立し、仲間との関係を深めていく。児童期から青年期への移行期には、社会性にも深く関わる自尊感情や有能感の低下が認められるが、養育者など大人が示す規範に抗い、仲間との関わりを通じて自己を形成していく葛藤が現れたものと考えられている。またこの時期には、競技性を増す活動の中で指導者と衝突する機会も生じ始める。発達で揺れる時期を乗り越え、スポーツを継続していくことは、その後の心理社会的な発達や健康的なライフスタイルを構築する上で重要である。

もとよりスポーツは、そうした社会性の発達を支える手段として期待されてきた。ただし国内外の研究は、スポーツによる正負両面の効果を報告しており、一貫した結論は得られていない。先行研究の指摘によれば、この理由には、縦断的検討の欠如が挙げられよう。発達の一時点についてスポーツ経験と社会性に関わる変数を収集すれば、関連を示す報告も見られる。しかし、ある時点の高低のみをもって、スポーツの効果を結論づけるのは適切ではない。例を挙げれば、スポーツ経験の結果として積極性が育つのか、それとも、積極的な子どもがスポーツを行うのかについては、横断デザインでは明らかにできない。他にも横断研究では、適応指標に対する多様な影響を考察することに限界がある。青年期に著しい心理変化が認められることは先に述べたが、この時期のアスリートが示す心理的揺らぎや停滞は競技にも影響しよう。これらの発達期の特徴と、スポーツ経験の純粋な効果とを区別するには、個人をフォローアップすることにより他の発達期と照合することが欠かせない。発達の要因がスポーツの効果に干渉する場合は特に、結果を正しく解釈する上で横断研究は不向きである。

そこで発達期の心理を考慮した縦断的なエビデンスが求められている。青年移行期には、園・学校生活を通じて運動遊びや体育に親しみ、他にも地域の活動に参加してスポーツを身近なものとしてきた子どもたちが、これらの活動から離脱していく時期でもある。背景に発達の揺らぎや停滞の要因も指摘されており、問題への対処は健康的なライフスタイルを構築する基礎にもなる。スポーツへの関与を支える環境整備とともに、自尊感情やコンピテンスなど社会性に関わる心性を支援する関わりによって、離脱に揺れる青年の判断を踏み止まらせる効果も期待もできる。

1-2. 継続と発達を捉える枠組みとしての動機づけ理論

活動の継続を支え、社会性の醸成に関わるモデルとして、動機づけの2つの理論が知られている。一つは自己決定理論(以下SDT)であり、生得的な3つの心理的欲求(自律性、関係性、コンピテンス)を仮定し、適応的な活動の要件としてこれら欲求の充足を訴えている(Deci and Ryan, 1985, 2000, 2008)。もう一つは達成目標理論(以下AGT)であり、コンピテンスを知覚する2つの志向性(マスタリーとパフォーマンス^{注1})を仮定し、自己の成長によってコンピテンスを満たすマスタリーを望ましい志向性と位置づけている(Ames, 1984; Dweck and Leggett, 1988; Nicholls, 1989)。2つの理論が共通して参照するのが環境要因としての動機づけ雰囲気であり、選手を取り巻く場の構造や、選手がおかれた文脈を指し示す(Ames and Archer, 1988)。動機づけ雰囲気がどのようなかによって、動機づけの自律性や目標志向性が左右されると考えるこのモデルでは、近年、この雰囲気を構成する人物(動機づけエージェント)が誰であるかにも注目してきた。なぜなら競技の文脈では、指導者、養育者、仲間など、競技に影響を与える重要な他者の重みづけが、発達に伴い移り変わるからである(Atkins, Johnson, Force, & Petrie, 2015)。競技の継続を支える上でも、さらには、競技を通じて子どもが心理社会的な発達を遂げる上でも、それぞれの発達期にエージェントが果たす役割を解明していくことには意味がある(Amorose, Anderson-Butcher, Newman, Fraina, & Iachini, 2016; Keegan, Harwood, Spray, & Lavallee, 2014)。こうした背景から近年では、青年移行期を対象として、競技の継続や社会性に関わる動機づけ雰囲気の影響を検討する研究が実施され始めている。

2. 研究の目的

先行研究の課題と本稿の目的

上で述べた課題に基づき概観した研究をTable 1に整理した。抽出の条件(縦断デザインであること、動機づけ雰囲気の枠組みに依拠していること、複数の動機づけエージェントを扱っていること)はすべての研究で満たすに至らず、エージェントの組み合わせも各1~2例を示したに過ぎないが、指導者によるマスタリー関与が継続と発達の基礎となる点があがえる。加えて移行期初期には養育者の関与が、移行期終期には仲間の関与が重要性を増し、エージェントの重みづけは先行知見が指摘するように、発達に伴う変化が予想される(O'Rourke, Smith, & Smoll, 2014)。ただし、研究の蓄積はメタ分析を実施できるほどには十分ではなく、縦断デザインが用いられた場合でも最長で1年×2時点の調査に留まっている。移行期におけるエージェントの相互影響性を捉えるには、選手の継続と発達に並走したより長期のデータが求められよう。この課

Table 1 選手の社会性の発達と動機づけ雰囲気に関連に関わる先行研究

出典	デザイン	対象年齢	動機づけ雰囲気の検討に用いられた尺度			主な結果
			指導者	養育者	仲間	
Ntoumanis et al. (2012)	縦断 (半年)	12-16歳	MCSYS (Smith, Smoll, & Cumming, 2008)	-	PeerMCYSQ (Ntoumanis & Vazou, 2005)	指導者と仲間のマスターリー関与がともに重要である
Joesaar et al. (2012)	縦断 (1年)	11-16歳	PASSES ^注 (Hagger et al., 2007)	-	PeerMCYSQ (Ntoumanis & Vazou, 2005)	指導者による自律性支援が、仲間のマスターリー関与を支える
Gauderau et al. (2016)	縦断 (2ヶ月)	11-13歳	PASSES注 (Hagger et al., 2007)	PASSES ^注 (Hagger et al., 2007)	-	指導者の自律性支援の高さが、養育者の自律性支援の低さを補償する
Atkins et al. (2013)	横断	10-14歳	-	PDPR (Paulson, 1994a, 1994b); PIAS (Anderson, et al., 2003)	PeerMCYSQ (Ntoumanis & Vazou, 2005)	養育者のマスターリー関与が影響し、仲間のマスターリー関与は影響が見られない
梅崎他 (投稿中)	縦断 (1年)	10-13歳	-	PIMCQ-2 (White & Duda, 1993)	PeerMCYSQ (Ntoumanis & Vazou, 2005)	養育者のパフォーマンス関与が高い場合には、仲間のマスターリー関与は程度に関わらず影響しない
Atkins et al. (2015)	横断	12-15歳	PMCSQ-2 (Newton, Duda, & Yin, 2000)	PIMCQ-2 (White & Duda, 1993)	PeerMCYSQ (Ntoumanis & Vazou, 2005)	指導者、養育者、仲間ともにマスターリー関与が重要である

注 自律性支援の測定に用いられた。厳密には動機づけ雰囲気を捉える尺度ではない。

題を踏まえ、梅崎他 (投稿中) のフォローアップにより収集された 3 時点データの解析結果を報告する。

3. 研究の方法

3-1. 手続き

児童期の競技人口が多く、移行期に一定の離脱が生じるスポーツのうちサッカーを対象とした。2019 年 4 月に著者が所属する機関の研究倫理委員会より調査の承認を受け、全国 9 地域 (北海道, 東北, 北陸, 東海, 関西, 中国, 四国, 九州) に所在するサッカー協会や日本プロサッカーリーグ所属クラブを通じて、サッカーをする子どもをもつ家庭に協力依頼文を配布した。依頼文では、調査の参加が任意であることや個人情報厳重に守られることなどを説明し、応諾した選手と養育者が調査に参加した。

3-2. 期間

2019 年 (以下 T1), 20 年 (以下 T2), 21 年 (以下 T3) の各 6 月に 1 ヶ月の期間を設定してアンケートの送付と回収を行った。T1 時点の調査に参加した家庭は 104 家庭であり、青年移行期に揺れや停滞が見られる心理発達の検討を目的として、T1 時点の対象学年を小学 5 年生 (M=10.72 ± .26 歳, うち女兒 1 名。同時点の養育者 (母親): M=41.84 ± 4.34 歳) に統一した。選手はみな、少なくとも中学 1 年生までサッカーを継続した。時点ごとのデータ数は欠損のために異なるが (Figure 2 参照), この分析では、本研究で関心のある変数の少なくとも 1 つに関する情報をもつ参加者を解析の対象とした。

3-3. 調査内容

選手の向社会性 (Goodman, 1997; 菅原, 2007), サッカーのコンピテンス (Ng, Lonsdale, & Hodge, 2011), 指導者の動機づけ雰囲気 (Appleton, Ntoumanis, Quested, Viladrichm & Duda, 2016), 養育者の動機づけ雰囲気 (White & Duda, 1993), そして仲間の動機づけ雰囲気 (Ntoumanis & Vazou, 2005) についてデータを収集した。動機づけ雰囲気の尺度について、各下位因子は次に示す通りであった。指導者: TI (マスターリー関与), AS (自律性支援), SS (社会性支援), EI (パフォーマンス関与), CC (統制的コーチング), 養育者: LEC (学習/楽しさ雰囲気), WCC (不安助長雰囲気), SWEC (結果主義的雰囲気), 仲間: RS (関係性支援), Imp (上達), E (努力), CC (チーム内の競争), CA (能力評価), IC (チーム内の葛藤)。

3-4. 解析

本研究では、潜在成長曲線モデル (以下 GLM) を用いた 3 時点データの解析を行う。GLM は欠損データがあっても使用でき、縦断データを扱う上で利点をもつ (Curran & Muthen, 1999; Enders, 2001)。まず切片と傾きから、社会性の発達に対する個人差と分散を明らかにする。その上で変化 (傾き) に関わる要因として、3 エージェントによる動機づけ雰囲気の傾きに対する関連を探った (Figure 1)。これらの統計処理には、IBM SPSS Statics Ver .27 と Amos Ver .27 を使用した。

4. 研究成果

4-1. 結果

変数間の関連

解析に先立ち、収集された変数の特徴を確認した。まず向社会性では、Moriwaki & Kamio, 2014

において、10-12歳が6.26(±2.15)点、13-15歳が5.91(±2.20)と報告されている。これに対し本研究では、小5(11歳)が6.71(±2.22)点、小6(12歳)が5.97(±2.23)点、中1(13歳)が5.91(±2.06)点と近似値を示し、青年移行期にかけて両研究で同じように得点の低下が見られた。

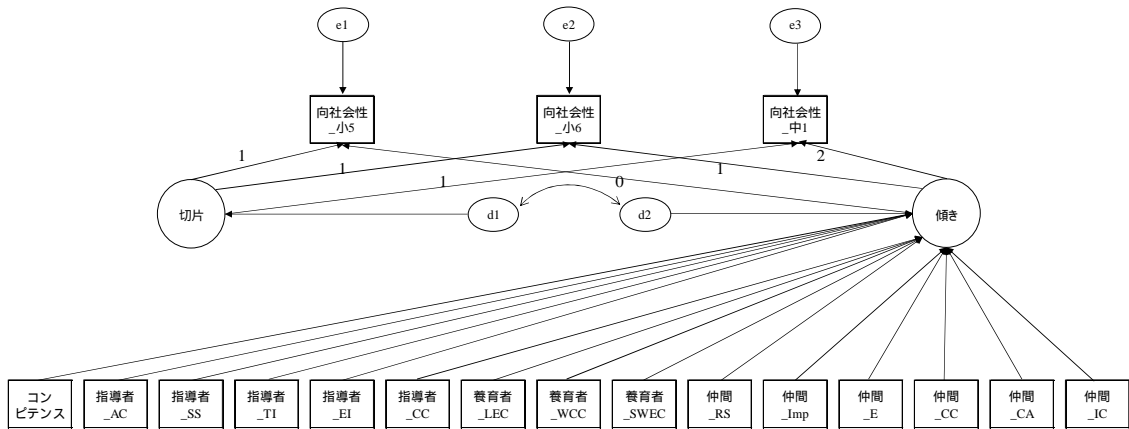


Figure 1 実証分析のための潜在成長曲線モデル

(注) 相関はd1とd2間のみ記載し、説明変数の相関は図が煩雑になるので省略した。

次にコンピテンスについて、Ng, Lonsdale & Hodge (2011) と本研究の値を順に見ると 28.91 点 (5 項目の平均得点より算出): 24.46 点であり、平均 18.97 歳を対象とした Ng, Lonsdale & Hodge (2011) の得点の方が約 3.5 ポイント高かった。

最後に 3 エージェントの動機づけ変数について、原版の合成得点と本研究の得点を順に示す。まず指導者 (Appleton et al., 2016) は、TI=36.00 : 34.29, AS=19.18 : 18.55, SS (本研究で除外された項目を原版からも除外して算出) = 7.57 : 7.42, CC=18.14 : 21.33, EI=16.92 : 15.55 であった。次に養育者 (White, 1996) は、LEC=4.08 : 3.81, WCC=1.90 : 1.85, SWEC=1.77 : 1.83 であった。最後に仲間 (Vazou, Ntoumanis, & Duda, 2006) は、RS=5.24 : 4.90, Imp=5.19 : 4.83, E=5.64 : 5.19, CC=4.59 (原版の下位因子である競争 5 項目の値): 5.40, CA=4.59 (同じく競争 5 項目の値): 3.80, IC=3.18 : 2.73 であった。3 エージェントに共通して、マスタリー関与的な雰囲気は原版のポイントの方が高く、反対にパフォーマンス関与的な雰囲気は、本研究の方でポイントが高い傾向が見られた。

次に各変数間の関連について検討した。紙面の都合により、結果変数としての向社会性得点の関連のみを取り上げて述べると、向社会性得点の時点間の関連は、T1 と T2 が $r=.70$ ($p<.001$), T2 と T3 が $r=.57$ ($p<.001$), T1 と T3 が $r=.53$ ($p<.001$) であり、いずれも有意な高い正の相関が認められた。この他、向社会性得点との関連が見られたのは、T2 時点の向社会性と T1 時点の養育者の SWEC のみであり、両者では有意な正の相関が示された。

時点間の相関が見られた向社会性得点を従属変数とし、1 要因の分散分析を実施したところ、効果量は極めて小さいものの $F(2, 284)=4.05$, $p<.05$, $\eta^2=.3$ と有意な差が示された。多重比較 (Tukey 法) の結果、T1 と T2 および T1 と T3 の間に差が見られ ($p<.05$)、小 5 から中 1 にかけて向社会性得点は有意に低下した (Figure 2)。

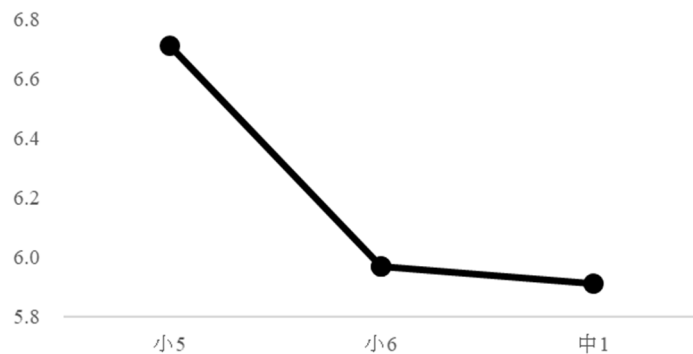


Figure 2 向社会性 (親評価) の変化

GLM による切片と傾きの推定

養育者が評価する選手の向社会性

性的変化について 1 次の成長曲線を仮定し、潜在曲線モデルによって切片と傾きを推定した。モデルの当てはまりは $\chi^2=2.55$, $df=1$, $n.s.$, $CFI=.977$, $RMSEA=.103$ であり、必ずしも十分な値ではなかった。

推定された切片の平均値は 6.62、傾きの平均値は -.39 であった。また、切片と傾きの相関係数は $r=-.58$ と有意傾向を示した ($p=.05$)。切片と傾きの間に負の有意傾向が見られたということは、小学 5 年生時点の向社会性とその後減少には、負の関連があることを示唆している。

切片と傾きに対する動機づけ雰囲気 (指導者、養育者、仲間) の影響

向社会性の傾きに対して、選手が認知する 3 エージェント (指導者、養育者、仲間) の動機づけ雰囲気の影響を検討した。モデルの当てはまりは $\chi^2=38.77$, $df=31$, $n.s.$, $CFI=.989$, $RMSEA=.041$ であり、説明変数を加えることにより適合度が向上した。傾きに対して有意差を示

した変数は、養育者のLEC(学習/楽しさ雰囲気)のみであり、正の関連を示して社会性の低下を抑制した。影響力(非標準化係数)は.06($p < .05$)であった。この結果から、平均LECの値(34.23)よりも1高い選手は、そうでない選手に比べて高社会性を.06ポイント高め、移行期の発達に伴う社会性の低下を抑制していた。

4-2. 考察

青年移行期の社会性の発達に対するスポーツの効果を検討した先行研究には、肯定的な効果と否定的な効果の報告が混在している。この理由を、心理発達の著しい移行期を対象としていながら、対象の縦断的な検討を行って、スポーツの効用と心理発達の影響を切り分けるデザインを欠いてきた点に求めた。社会性の発達を支えるスポーツ環境の枠組みに動機づけ雰囲気を援用し、選手の環境を支える主要なエージェント(指導者、養育者、仲間)を同時に扱って、その影響を検討した。この結果、先行研究が示すように、青年移行期にかけて対象者は社会性を低下させるが、養育者によるマスターリー関与的な動機づけ雰囲気としての、学習/楽しさ雰囲気の高さは、この低下を抑制する効果を示した。養育者のマスターリー関与的な支えは、あるいは競技力向上には直結しないものの、選手が競技を継続し、競技を通して社会性を育む機会を守ることを示した。一方、他のエージェントの影響が見られなかった点に関しては、データ収集を継続して検討する必要があるだろう。

本研究の課題として、4点を挙げる。1点目は、解析に用いたGLMは、統計手法としての最尤法を用いる。この方法は大量のデータを必要としており、本研究でも欠損を最小にしながら縦断研究を進める必要があった。2点目は、対象者のリクルートの際に、性別、種目や、競技レベルといった要因を考慮する必要があった。本研究ではほぼ男児を対象としたが、女児を対象とした研究においてユニークな動機づけ雰囲気の影響を報告するものもある。3点目は、先行研究が共通して用いる尺度を選び、原著者に依頼の上、尺度のバックトランスレーションを行って使用したものの、一部の項目では因子としてのまとまりや十分な内的整合性を欠いた。尺度開発に協力をした対象者の方が、本研究で対象とした対象者よりも年齢が上であったこともあるが、加えて文化差を考慮した検討が必要かもしれない。そして4点目は、こうした尺度のうち指導者の動機づけ雰囲気について、自己決定理論と達成目標理論を統合した新しい概念に基づくEmpowering/Disempowering 雰囲気を用いた。本研究では社会性に対する指導者の影響は見られなかったが、旧来の概念と新しい概念とを併用した検討により、効果を抽出できなかった可能性がある。

以上の課題はあるものの、本研究では縦断的なデザインにより、社会性の発達に対する主要なエージェントの影響を検証した。スポーツの恩恵を受けながら、人間的にもたくましく成長する個人の発達にとって、養育者のマスターリー関与的な関わりが重要であることを示した意義は認められよう。今後も、本研究の課題を解消しつつ知見を重ねることで、競技の継続と社会性の発達に対するエージェントの相互補完的な役割について議論が可能になる。こうした議論の方向性は、子どものスポーツにとって誰が最も重要かを定めるよりも、はるかに建設的な議論になり得ると思われる。

Table 2 記述統計量と相関係数

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r
a: 向社会性(小5)																		
b: 向社会性(小6)	.70 ***																	
c: 向社会性(中1)	.57 ***	.53 ***																
d: コンピテンス	.07	-.01	-.08															
e: 指導者_AS	-.00	-.08	.08	.20 *														
f: 指導者_SS	.14	.12	.15	.21 *	.71 ***													
g: 指導者_TI	.10	.02	.14	.12	.76 ***	.65 ***												
h: 指導者_CC	-.08	.07	-.07	-.01	-.11	-.20 *	-.13											
i: 指導者_EI	-.06	.15	-.10	.03	-.22 *	-.27 **	-.22 *	.73 ***										
j: 養育者_LEC	.12	.13	.20	.33 ***	.35 ***	.21 *	.24 *	-.04	-.04									
k: 養育者_WCC	-.01	-.01	.07	-.23 *	-.15	-.20 *	-.12	.25 **	.18	-.23 **								
l: 養育者_SWEC	-.07	.25 *	.11	-.33 ***	-.22 *	-.09	-.09	.18	.16	-.27 ***	.43 ***							
m: 仲間_RS	.00	-.07	-.03	.29 ***	.43 ***	.52 ***	.51 ***	-.23 **	-.22 *	.33 ***	-.24 **	-.13						
n: 仲間_imp	.02	-.04	-.04	.23 **	.33 ***	.42 ***	.45 ***	-.12	-.15	.19 *	-.33 ***	-.06	.65 ***					
o: 仲間_E	.11	.06	.09	.16	.40 ***	.51 ***	.55 ***	-.11	-.18	.29 **	-.30 ***	-.11	.65 ***	.78 ***				
p: 仲間_CC	.09	-.04	.06	.20 *	.31 **	.36 ***	.44 ***	-.10	-.14	.22 *	-.30 **	-.10	.46 ***	.68 ***	.68 ***			
q: 仲間_CA	-.13	-.03	-.12	.13	-.11	-.13	-.11	.37 ***	.41 ***	-.03	.15	.18	-.18	-.05	-.09	-.11		
r: 仲間_IC	.10	.18	.14	.01	-.12	-.20	-.16 *	.23 *	.33 ***	-.22 *	.35 ***	.15	-.44 ***	-.41 ***	-.48 ***	-.23 *	.25 **	
度数	104	105	78	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104	104
平均値	6.71	5.97	5.91	24.46	18.55	7.42	34.29	21.33	15.55	34.21	9.25	7.31	14.69	19.30	25.95	10.79	7.59	10.92
SD	2.22	2.23	2.06	5.45	3.48	1.78	5.55	6.01	5.00	5.12	3.84	2.70	3.57	4.47	5.68	2.27	2.97	4.96
レンジ	1-10	0-10	1-10	5-35	8-25	2-10	16-45	10-37	7-34	17-44	5-20	4-15	3-21	6-28	9-35	3-14	2-14	4-24
α	.74	.71	.63	.87	.68	.64	.85	.78	.78	.78	.82	.66	.67	.75	.86	.57	.48	.76

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 梅崎高行	4. 巻 59
2. 論文標題 スポーツ活動と動機づけ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 170-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5926/arepj.59.170	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 梅崎高行・酒井厚・眞榮城和美・室橋弘人	4. 巻 47
2. 論文標題 児童期におけるサッカーのコンピテンスと向社会性の相互影響性：家庭の養育態度との関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 スポーツ心理学研究	6. 最初と最後の頁 75-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4146/jjsspopsy.2020-1909	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 梅崎高行・酒井厚・則定百合子・眞榮城和美・田仲由佳・前川浩子・酒井彩子・松本聡子・高橋英児・室橋弘人	4. 巻 10
2. 論文標題 約束不履行に対する年中児の疑問的態度：家庭での約束事と気質の関連	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子育て研究	6. 最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24719/jscr.k10001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 梅崎高行	4. 巻 70
2. 論文標題 アスリート・アントラー・ジュとしての親役割：子どもの心理社会的発達環境要因	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 体育の科学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梅崎高行・北村勝朗・中山雅雄・杉山佳生	4. 巻 44
2. 論文標題 実行機能と選手評価の関連：フットサル競技における検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 健康科学（九州大学 健康科学編集委員会）	6. 最初と最後の頁 95-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4773212	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 梅崎高行・小湊真衣・高向山・山際勇一郎
2. 発表標題 3-4歳児における「読み書き」と「自己コントロール」の発達に関連：相互影響分析を用いた保育者の発達観への注目
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会発表論文集
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高向山・若尾良徳・梅崎高行・山際勇一郎・小湊真衣
2. 発表標題 電子連絡帳導入を含めた保育のICT化に関する幼児教育現場の意識について：テキストマイニングによる一考察
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会発表論文集
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上淵寿・大芦治・高崎文子・鈴木雅之・梅崎高行
2. 発表標題 動機づけ研究の最前線：これから発展を期待する分野に焦点を当てて（コロナにより総会未開催）
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会発表論文集
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梅崎高行・酒井厚・眞榮城和美・前川浩子・則定百合子
2. 発表標題 青年移行期のスポーツの自律的動機づけに関わる養育者の影響：仲間の動機づけ雰囲気との相互作用
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会発表論文集
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 眞榮城和美・酒井厚・梅崎高行・細川美幸・渡辺弥生
2. 発表標題 就学移行期における子どもの発達と適応：生態学的システム理論に基づく観点からの検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会発表論文集
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Sakai Atsushi, Maeshiro Kazumi, Takayuki Umezaki, Murohashi Hiroto, Maekawa Hiroko
2. 発表標題 Developmental changes and correlates of proposal behavior among preschool years: A Japanese longitudinal study 1
3. 学会等名 19th European conference of developmental psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takayuki Umezaki, Kazumi Maeshiro, Yuriko Norisada, Eiji Takahashi, Atsushi Sakai
2. 発表標題 Correlations between physical exercise and problem-solving strategies in interpersonal conflict settings: A Japanese longitudinal study 2
3. 学会等名 19th European conference of developmental psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazumi Maeshiro, Hiroto Murohashi, Takayuki Umezaki, Ayako Sakai, Yuka Tanaka, Atsushi Sakai
2. 発表標題 The relationship between children's competence and mother's global self-worth: A Japanese longitudinal study 3
3. 学会等名 19th European conference of developmental psychology (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 梅崎高行	4. 発行年 2019年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 248
3. 書名 新・動機づけ研究の最前線 (5章 自己と文化のアプローチ)	

1. 著者名 梅崎高行	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晶文社	5. 総ページ数 272
3. 書名 アスリートのメンタルは強いのか? (第5章 親子関係 ジュニアアスリートのペアレンティング)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

投稿中論文 1. 梅崎高行他 多次元動機づけ雰囲気観察システム (MMCOS) 日本語版の作成 パイロットスタディ 2. 梅崎高行他 青年移行期のスポーツの自律的な動機づけに関わる養育者と仲間の相互影響性
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	酒井 厚 (Sakai Atsushi) (70345693)	東京都立大学・人文科学研究科・教授 (22604)	
研究分担者	眞榮城 和美 (Maeshiro Kazumi) (70365823)	白百合女子大学・人間総合学部・准教授 (32627)	
研究分担者	前川 浩子 (Maekawa Hiroko) (10434474)	金沢学院大学・文学部・教授 (33305)	
研究分担者	則定 百合子 (Norisada Yuriko) (10543837)	和歌山大学・教育学部・准教授 (14701)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	室橋 弘人 (Murohashi Hiroto)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関